

函館ワンニャン物語 ⑫ ～キミー 2～

◆館岡家自宅

居間に、キミーを囲み家族がいる。
キミーを見守る咲の目に、不安が募る。

咲「門脈シャントって、どんな病気？」

数時間前に、キミーの様子がおかしいので、〇動物
病院で診察を受けてきた。
その結果、門脈シャントと診断された。

洋一「肝臓の機能が低下することにより、アンモニアな
ど毒性の物質が、全身に流れてしまうんだって」

咲「アンモニアって、おしっこ？」

洋一「おしっこにも含まれてるよな。そのアンモニアが
中枢神経にとって毒であり、それが原因で、いろ
いろな症状が起きるらしい。」

咲「昨日いきなり起きた痙攣発作もそう？」

洋一「そうらしい。発作だけではなく、徘徊行動や旋回
行動、悪化すると視覚消失や昏睡状態にも陥るら
しい。」

咲「キミーがいきなり、かっちゃんてきたのもこの病気が原因なの？」

洋一「院長先生が、この病気の特徴の一つに、理由もな
く攻撃的な行動を取ることがあると、話していた
のできっとそうだと思うよ」

聖子「キミーとステフが捨てられた原因の一つが、この

病気のせいなのかもしれないわね。ところでステフは大丈夫なのかしら。」

洋一「俺も気になって、さっき代表さんを通して聞いてもらったところ、その症状は出ていないらしい。」

聖子「それなら、安心なんだけれど・・・」

咲「もし、病気だから捨てたとしたら、人間的に許せない。絶対、許せない。」

洋一「いろいろな事情があってキミーとステフを捨てたとは思いますが、連絡さえくれれば、こちらで引き取ったのに・・・」

聖子「そうよね。」

咲「人間て本当に勝手だわ。自分の都合しか考えていない。抑留所でのあの時だって、いいことばかり言っていたのに・・・、もう本当信じられない。」

門脈シャントは、薬では治すことができない病気である。

年をとるにつれてその症状は悪化し、最終的には死に至る。

◆館岡家玄関（翌日）

仕事が終わって、洋一が帰宅する。

洋一「ただいま」

聖子「お帰りなさい。ちょうどいいところに帰って来たわ。今日は、病院に連れていくの3匹なの。」

洋一「えっ、キミーの他に二匹？」

聖子「ナナとポン太よ。時間がないの、ナナをキャリーに入れてくれる？」

洋一「わかった。でも、もう7時だから急がないと病院が閉まってしまうぞ。」

聖子「わかったわ。」

キミー、ナナ、ポン太、三匹の猫を車に乗せ、慌てて病院に向かう。

ナナとポン太は、口内炎である。

猫にとって口内炎は、不治の病である。

館岡家にはこの他、金太、プー、シロも口内炎で、毎日のように病院通いをしている。

猫が四十三匹、犬が五頭もいればしかたがない。

餌代、病院代等にかかる費用は、月に十五万を超えた。

家族みんなで働いて得たお金は、犬と猫のために消えていく。

◆自家用車内（病院に向かう途中）

洋一「何とか、時間には間に合いそうだけど、お金は大丈夫なの？」

心配そうに、聖子に尋ねる。

聖子「今日は、大丈夫よ。でも、今月もかなり厳しいわ。」

洋一は現在、校長である。

教育公務員の最高職であるからには、それなりの

給与のはずである。

しかし、今は借金に追われるほど、厳しい状況であった。

家族が一丸となり、経済的にも肉体的にも、そして精神的にも厳しい日々を乗り越えている。

◆館岡家自宅（ある日の一日）

午前五時三十分、目覚ましのベルが鳴る。

一斉に起き、それぞれの仕事（犬・猫の世話）に就く。

◎世話の内容（全部室内飼い）

【犬の場合】

- ・犬舎の掃除
- ・ペットシートの取り換え
- ・餌、水やり

【猫の場合】

- ・部屋の掃除
- ・トイレの砂の交換
- ・餌、水やり

*洋一 : 五頭の犬の散歩・世話
五匹の猫の世話

*聖子 : 十九匹の猫の世話

*桜子 : 十八匹の猫の世話

(朝の二時間は、犬と猫の世話に取られる。時には、朝食をとる時間もなく仕事に行くこともある。)

午後六時～八時、家族それぞれが帰宅。

その後、それぞれの仕事（犬・猫の世話）に就く。
午後十時から十一時に遅い夕食をとる。
就寝時刻は、ほとんど十二時をまわる。
犬と猫の世話を追われる毎日である。

（「函館ワンニャン物語 ⑬」へ続く・・・）